

## ハーバード大学 ジョスリンキャンプ、バートンキャンプに参加して

保健看護学部 3年生 中原 梓  
2年生 森 文香

今回私たちはアメリカのボストンで行なわれていた、I型糖尿病の男の子のためのジョスリンキャンプ、女の子のためのバートンキャンプに5日間参加してきた。

このキャンプでは糖尿病児の他に医師や看護師、そしてジュニアカウンセラーが参加しており、参加者の多くがI型糖尿病であった。

ジュニアカウンセラーが中心となり、バスケットボールやホッケー、池でのスイミング、釣りやおいかけっこ、ninja遊び、工作など、子供たちはたくさんのアクティビティを楽しんでいた。遠足でローラースケートに行ったり、夜はカジノやダンスパーティーを行ったりしていた。私たちも一緒になり、とても楽しんだが、子供たちは病気を感ぜさせないほど生き生きしており、笑顔が絶えなかった。それでもやはり、低血糖がおきるとぐったりして、皆と離れて休む姿がみられた。そのときの子供は、とても悔しそうですごく落ち込んでいた。私たちは声をかけることもできず、ただ呆然と傍でいるだけだった。しかし体調が戻るとまた元気に駆け出していき、とても安心した。

非常に印象に残っているのは、キャンプの糖尿病をもつ人のほとんどがインスリンポンプをつけていたことだ。このキャンプでインスリン注射をしている子供はたった一人しか見られず、日本とは全く逆であった。このことについてキャンプに参加していた医師にも話を聞き、アメリカの医療の先進性を感じた。

そして、子供たちの自主性を尊重する姿勢も印象に残っている。例えば食事は、自分で単位を計算し、メニューの中から何を食べるか選ぶ。インスリンポンプの調節も看護師の補助を受けて、自分で行なう。キャンプが終わってからの日常生活でも自己管理できるような訓練になっているのではないかと感じた。日本で糖尿病児のキャンプに参加した際には、全て大人が管理していたので、大きな違いを感じた。

また、私たちがとても感銘を受けた絵について紹介する。その絵は医務室にはってあったものなのだが、こんなメッセージが書かれていた。“小さいころ、私は糖尿病で一人だった。お母さんがキャンプに電話をし、私はいまここにいる。幸せである。私はノーマルで自由だと感じている”

このキャンプに参加する、無邪気な笑顔を見せる子供たち。しかし家に帰り日常生活を送る上で、さまざまな制限や低血糖による症状、さらに周りの人の理解の欠如による偏見など、私たちには想像のつかない辛さを味わってきた子供も存在するだろう。しかしそんな彼らにとって、みんな自分と同じ糖尿病で、楽しさも喜びも辛さもわかちあえる、このキャンプは、それぞれに非常に大きなものとなっているのだろうと強く感じた。キャンプに参加した後、またみんな頑張っていくことができるのだろうと思った。

キャンプ参加中、言葉の壁は大きく、自分の話す英語が全く通じなかったり、言いたいことが言えず伝えることができなかったり、逆にネイティブの英語が全く聞き取れなかったり、コミュニケーションに苦勞して落ち込むことも多かった。しかし、日が経つにつれ、少しではあるがだんだん英語が聞き取れるようになり、自分のことをわかってもらおうと、ジェスチャーや表情で工夫して話すと、つぎはぎの英語でも理解してくれるようになった。ノンバーバルのコミュニケーションの大切さを実感し、更にもっと語学を学ばなければと

いう向上心にもつながった。しかし何より感じたのは“笑顔は世界共通！”ということだ。

今回キャンプに参加し、糖尿病児と共に過ごし、子供たちを見て、糖尿病の知識はもちろん、医療など日本との違い、そして子供たちの実際の生活や気持ちについての理解が深まったことに加え、自らの視野が広がった。また人種や言葉が違って理解し合えるのだということが身をもってわかった。ほんとうに、今しかできない、かけがえのないすばらしい経験ができたと思う。今回学んだことは、これから進む道の上で私たち自身にとっても役立っていくだろうし、また多くの人にも伝えていきたい。

こんなチャンスを与えてくれた大学に本当に感謝しています。ありがとうございました。

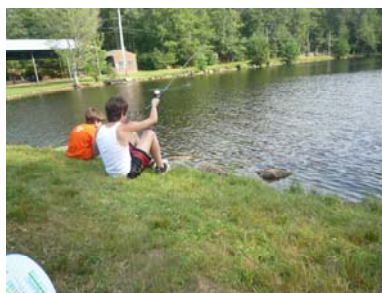


写真1 段目左…ネックレスづくりをする子達

中央…入り口付近に書かれた落書き

右…食事交換表をNsと作成

2 段目左…お父さんへのプレゼントを工作

中央…釣りを楽しむ子達

右…キャビン5の子達と

3 段目左…ジュニアカウンセラーの皆さんと

中央…ローラースケートを楽しむ

右…The Barton Center (女の子のキャンプ地)

4 段目…感銘を受けた、子供が書いた絵

